

新しい教職課程・保育士課程の目指すもの

教職課程・実習支援センター

センター長 洲脇 一郎

平成31年度から教職課程と保育士課程が新カリキュラムに移行する。教職課程、保育士課程ともに大きく変わることになる。教職課程では、特別支援教育、総合的な学習の時間の指導法、小学校では外国語活動・外国語など新たな科目が必修になったり、保育士課程も多くの科目の新設や統合があったりと、それぞれの課程に求められる内容が増えたといえるだろう。こうした新カリキュラムへの移行は、新学習指導要領・幼稚園教育要領、新保育所保育指針などの改訂を受けたものであり、これらに基づいて教育指導・保育ができる教員、保育士の養成が大学に求められているといっていよい。ともかくこの1年間、全国の教職課程を有する大学は文部科学省の再課程の認定を受けるべく、おおわらわであったのだ。

先日、教職課程に関する研究会に参加した。文部科学省の教職課程の担当者が「新しい教職課程への期待と今後の教員養成政策」と題して基調講演を行った。印象深い話だったので少し紹介したい。まず再課程の認定で終わりではなく、各大学が教職課程を不断に点検・評価して改善することが求められるとして、三つの視点から教職課程の改善・充実の方向性が示された。一つは教職課程に関する大学の裁量が拡大したので、それを生かして大学の特色を打ち出してほしいことである。第二にコアカリキュラムはベンチマーク（基準）としての役割があり、今後は教科に関する科目についてもコアカリキュラムを設定することが検討されている（外国語はすでに設定済み）。コアカリキュラムによって全国的な共通性を担保するとともに、各大学が創意工夫して独自性を発揮してほしい。第三に教育公務員特例法の改正によって、各任命権者が教員育成指標を定めることとされたが、大学は教育委員会と一層連携することが必要で、教育現場のニーズを把握することが求められる。

要は優秀な教員を養成し現場に送り出してほしいということなのである。コアカリや育成指標は出発点なのだ。話を聞いていると、教職課程の運営がやっとの大学と独自性を打ち出していく大学に分化していくのではないかと思われた。

さて、各方面のご協力を得て第2号を編集できた。特集として、スクールサポーター制度について神戸市教育委員会から寄稿していただいた。また教職課程検討部会、保育士課程検討部会の委員から教員・保育士を目指す学生に薦める1冊の本を紹介していただいた。さらに本学の卒業生に生活科の教育実践について執筆していただいた。教育委員会や卒業生・教育現場との連携は、この年報が企図しているところであり、今後ともこの方針を大事にしていきたい。

先に紹介した研究会である人が述べた。「教職課程だけが教員養成ではない。優れた大学教育が優れた教員を育てるという自覚が必要だ。」大学全体で優れた教員を養成したいものである。